

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 21 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530864

研究課題名(和文)達成動機づけにおける「他者」と「自己」の調整

研究課題名(英文)The reconciliation between 'other' and 'self' in achievement motivation

研究代表者

伊藤 忠弘 (Ito, Tadahiro)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：90276759

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：達成状況で他者の期待に応えることや他者への恩返しを意識する他者志向的動機は、親との良好な関係のなかで獲得されることが示された。他者志向的動機と自己志向的動機を両立させて統合している人は、感謝したり感謝されたりという経験が多いことが明らかにされた。また努力に対する肯定的な態度と関連することから、2つの動機の統合は達成行動に肯定的に働くことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study showed that undergraduates acquired other-oriented achievement motivation, that was defined as personal striving to achieve for responding to others' expectations and showing gratitude to others' supports, when their relationships with their parents were good. People who reconciled and integrated self-oriented and other-oriented achievement motivation were likely to feel gratitude and to be appreciated frequently. In addition, the positive correlation between the integration of two motivations and favorable attitudes about effort suggested that the integration might play a positive role on achievement behaviors.

研究分野：動機づけ

キーワード：動機づけ 達成行動 関係性 他者志向的動機 ボランティア 養育態度 感謝感情

1. 研究開始当初の背景

個人の動機づけに対して「他者」、「社会」、「文脈」が果たす役割がようやく研究の焦点が向けられるようになってきている。達成動機づけ研究では、「内発的動機づけ - 外発的動機づけ」という研究の枠組みのなかで「内発的動機づけが望ましく、外発的動機づけは結果的に学習者の興味・関心を損なわせ、自律性を阻害する」という二分法的な考え方が現在でも根強い。しかし近年、達成動機づけ研究に強い影響を及ぼしてきた自己決定理論において、基本的な人間の欲求として「有能さへの欲求」と「自律性への欲求」に「関係性への欲求」を新たに加え、内発と外発の間を段階的に移行するプロセスを想定したことは象徴的である。また Wentzel らの精力的な研究によって、クラス内の社会的責任や友人関係に対する目標のあり方が学業成績と関連していることが明らかにされてきた。日本でも 2003 年に『心理学評論』において「社会的文脈における動機づけの諸問題」という特集が組まれている。

しかし達成動機づけにおける「社会」や「他者との関係性」の重要性は、日本においてはかねてから指摘されていた。東(1994)はおよそ 20 年間にわたる日米の子育てや動機づけの比較研究をレビューして、与えられた課題が退屈な課題でも黙って受け取り勤勉に行く傾向(受動的勤勉性)と社会生活や育児などに見受けられる、人の気持ちを重視し知ろう、読もうとする傾向(気持ち主義)が日本に特徴的であると指摘した。そして日本的な意欲では、まわりの人々、特に強い相互依存で結ばれた親や家族といった身近な人々の期待を感じとり、それを自分自身のものとして内面化したものが原動力になると分析している。このような文化差は、サンフランシスコの小学生を対象にした Iyengar ら(1999)の実験研究において、アジア系の子どもがヨーロッパ系の子どもと比べて母親が選択した課題に対して自ら進んで努力する傾向が強いという知見によっても確認されている。

真島(1995)は野口英世の伝記を分析し、そこに外国人の偉人の伝記には見られない、自分の母親、先生、友だちへの恩返しという情緒的な理由・動機が全体を通して描かれていることを指摘した。また Markus ら(2006)はオリンピックに出場した選手に対する日米のテレビや新聞の報道を比較して、日本では選手自身の感情経験や周囲の人の期待(に伝えること)に言及されることが多いことを明らかにしている。「自己決定的でありながら、同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続ける」といった意欲の姿と定義される「他者志向的動機」(真島,1995)は日本文化においては一般的に認められる。しかし欧米の達成動機づけの理論はこのような動機づけに焦点を当てていない。

伊藤(2004)は達成行動の理由として挙げられる「自分のため」と「他者のため」とい

う 2 つの動機について、自分の思うところを大学生に自由に記述させ、その記述を KJ 法により分類、整理した。さらにこの記述に基づき、「自己・他者志向的達成動機に対する態度」尺度を作成し、現在の研究に至るまで使用している。

伊藤のその後の研究では、大学生に最も努力した経験と中学・高校時の勉強を想起させ、その際の努力のあり方、および親や友人といった周囲の重要な他者の関わり方について面接調査を実施してきた。大学生では「自分のため」の努力という捉え方が一般的であり、自己志向的な動機づけが望ましいとする考えが広く認められるが、その一方で「周りの人のため」に達成に向けて努力してきたと捉えたり、2 つの動機の両方の重要性を認める者も多い。他者志向的動機は主観的報告による学業成績や達成動機づけと相関があり、達成行動に肯定的な影響を及ぼしていることも示唆された。ただし他者からの期待に伴うプレッシャーや達成できなかったときの罪悪感など他者志向的動機の否定的な側面も広く認知されている。その結果として自己志向的動機と他者志向的動機の関係づけのあり方(対立的・二律背反的にとらえているか、それとも両者を接近させている、あるいは統合させているか)に個人差が認められる。そして他者志向的動機の獲得には、親との関係や親から期待された経験が影響していると考えられ、また長期的には個人の達成経験や周囲の他者から期待された経験によって変化すると予想される。

2. 研究の目的

従来の達成動機づけに対して「内発的動機づけ - 外発的動機づけ」という観点ではなく、課題達成を取り巻く文脈、特に「他者との関係性」が達成動機づけに及ぼす影響に焦点を当てる。「自己決定的でありながら、同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続ける」といった意欲の姿と定義される「他者志向的動機」という概念を中心に据えて、現実の達成状況で「自分のため」と「周りの人のため」という一見相反するような 2 つの動機をどのように調整、統合して、学習者が達成課題に臨んでいるのか、その様態を明らかにする。

この目的のために「他者志向的動機」という概念の精緻化と測定方法の確立を目指す。また自己志向的動機と他者志向的動機の関係づけのあり方(2 つの動機の調整と統合)を捉えるための枠組みを提出する。そしてこの関係づけのあり方をもたらず発達の要因(達成経験、他者から期待された経験、親の養育態度、親から期待されている内容、達成場面における他者の捉え方など)を検討する。

3. 研究の方法

(1) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。

調査内容は、自己・他者志向的達成動機に対する態度尺度、親の養育態度（関係性）を尋ねる尺度、親から期待される内容および大きさの認知を尋ねる尺度、親の学業への関わり方を尋ねる尺度、個人志向的・社会志向的達成動機尺度である。

(2) 大学生を対象に質問紙調査および REAS（リアルタイム評価支援システム）を用いたインターネット上での調査を実施した。質問紙の内容は、自己・他者志向的達成動機に対する態度尺度、親の養育態度（関係性）を尋ねる尺度、であった。REASでは一週間にわたり1日3回その時点で感じている様々な対人感情（感謝、他者への信頼、孤独など）と全体的感情（安心、心配など）を報告させた。さらに毎日1日を振り返って「人に感謝した経験」と「人から感謝された経験」の有無とその具体的なエピソードを報告してもらった。

(3) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、自己・他者志向的達成動機に対する態度尺度とボランティア活動に対する認知的評価を尋ねる尺度であった。

(4) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は自己・他者志向的達成動機への態度尺度と、本研究のために自ら作成した感謝感情の感じやすさを測定する尺度と感謝されることに対する態度を測定する尺度であった。また別の大学生には場面想定法を用いて様々な他者に対する感謝感情を測定する質問紙を作成し実施した。

(5) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。近い過去あるいは遠い過去を振り返って他者に感謝を感じた状況および他者から感謝を感じた状況を想起させてその内容を記述させると共に、その状況での感謝感情、肯定感情、否定感情、負担感等を尋ねた。そしてこの反応と互恵的な対人関係意識の関連を調べた。

(6) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は自己・他者志向的達成動機に対する態度尺度と、本研究のために「努力は必ず報われる」という言説に対する意見や態度を収集した自由記述データに基づいて作成した、努力観を調べる尺度であった。

(7) 大学生を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は自己・他者志向的達成動機に対する態度尺度と、場面想定法により自分の達成行動に他者から声援を受けた場合の動機づけや感情への影響と相手に対する評価を尋ねるものであった。

4. 研究成果

(1) 「親の学業への関わり方 親から期待される内容および大きさの認知 自己・他者志向的達成動機のあり方」という因果関係が親との関係性によって調整されるというモデルを検討した。

他者からの期待が学業達成に与える影響は、他者からの期待がプレッシャーとなり、

子どもに不安や罪悪感を生じさせ、達成行動に否定的に働くという負の影響と、期待されることが肯定的な自己概念や自信につながって、達成行動に肯定的に働くという正の影響が考えられ、両方の影響は親との関係性によって調整されていることが確認された。

(2) 対人感情の1週間の平均的トーンの分析では、他者志向的達成動機を保持している人が周囲の他者との関係において日常的に感謝や信頼感を感じやすいという結果が得られた。また感謝された出来事を多く報告した人の方が、他者志向的達成動機を保持している傾向が認められた。

また階層線形モデルを用いて、1週間の日々における感謝感情と一般的な快感情との関連の強さが、自己・他者志向的動機に対する態度の違いで異なるかどうかを検討したところ、男性では達成動機の態度とは関係なく、感謝を感じている人ほど一般的に快感情も高かった。女性では他者志向的動機と自己志向的動機を統合している人で、感謝感情と一般的な快感情の関係が強く、感謝を感じることのウェルビーイングにおける重要性が示唆された。

(3) 他者志向的動機に肯定的な態度を持つ者は、ボランティア活動のもたらす利己的な側面についても肯定的に捉えるのに対して、他者志向的動機を結局は「自分のため」のものとして懐疑的に捉えている人は、ボランティア活動の利己的側面、偽善的な側面を意識しやすいことが明らかにされた。

(4) 他者志向的動機と自己志向的動機を統合している人が、他者から感謝される経験が多く、さらにそれに対して喜びを感じやすいことが明らかにされた。

(5) 過去の感謝を感じた状況では、互恵意識の高い人が感謝感情も肯定感情も強く感じていた。また返礼意識が心理的負担感と関連していた。さらに損得意識が否定的感情と関連していた。過去の感謝された状況では、互恵意識の高い人が相手からの感謝を強く推測しやすく、それに伴う肯定感情も強かった。また返礼意識の高い人が相手の心理的負担感を推測しやすかった。

(6) 他者志向的動機と自己志向的動機を統合している人が、継続的な努力が望ましい結果を生じさせると信じる傾向と、努力すること自体に価値を置く傾向を保持していた。一方、他者志向的動機に負担感を感じる人や他者志向的動機に利己性を認知している人は、努力が報われるという言説に対して懐疑を示した。

(7) 他者志向的動機と自己志向的動機を統合している人が、他者の声援に肯定的に反応していた。他者志向的動機に利己性を認知している人は、声援を否定的に捉えていた。

本研究全体を通して、達成状況において他者志向的動機と自己志向的動機を統合して関係づけている人の特徴が明らかとなった。2つの動機の統合は、重要な他者との良好な

関係のなかで高い期待や支援を受け、他者に対して感謝する経験や、あるいは自分の行為によって他者から感謝されるという経験をするなかで形成される。他者志向的な達成動機づけは、感謝の感じやすさ、互恵的意識の高さ、助けてくれたり応援してくれたりする他者に対する肯定的評価と関連することが明らかにされた。

向社会的行動やボランティア活動の動機の解釈においても、「自分のため」でも「人のため」でもあるという2つの動機を統合させた解釈が可能である。このような達成行動と向社会的行動や活動の背後に仮定されるより広い意味での「他者志向性」に基づく動機づけのプロセスを解明していくことが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

伊藤忠弘 2014 感謝を感じる経験と感謝される経験における感情 学習院大学文学部研究年報,61,99-117. 査読無

伊藤忠弘・平井花 2013 大学生の日常的な感謝感情および感謝された経験と他者志向的達成動機 学習院大学文学部研究年報,60,159-175. 査読無

伊藤忠弘 2012 達成動機への態度とボランティア活動の動機 学習院大学文学部研究年報,59,79-97. 査読無

伊藤忠弘 2012 動機・欲求概念を用いた研究の動向と概念の有効性についての一考察 青山心理学研究,12,1-12. 査読無

伊藤忠弘 2012 わが国の最近1年間における教育心理学の研究動向と展望:社会部門 対人関係と関係性に関連した社会心理学の研究動向 教育心理学年報,51,42-52. 査読無

伊藤忠弘 2011 他者志向的達成動機と親の期待内容および期待観の関係 青山心理学研究,11,11-21. 査読無

〔学会発表〕(10件)

伊藤忠弘 2014 直接的な支援でない場面における感謝感情 日本教育心理学会第56回総会 神戸国際会議場 2014年11月7日~9日

伊藤忠弘 2014 感謝される経験と感情経験の頻度および達成動機づけ 日本心理学会第78回大会 同志社大学 2014年9月18日~20日

伊藤忠弘・平井花 2014 他者志向的達成動機と対人的感情経験の関連(2) 日本発達心理学会第25回大会 京都大学 2014年3月21日~23日

伊藤忠弘・平井花 2013 他者志向的達成動機と対人的感情経験の関連 日本心理学会第77回大会 札幌コンベンションセンター 2013年9月19日~21日

伊藤忠弘 2013 ボランティアへの評価と他者志向的達成動機への態度 - 「自己」

と「他者」という観点からの動機の分析による共通性 - 日本教育心理学会第55回総会 法政大学 2013年8月17日~19日

伊藤忠弘 2012 社会・個人志向的達成動機尺度の構造 - 自己・他者志向的達成動機との関連 - 日本心理学会第76回大会 専修大学 2012年9月11日~13日

伊藤忠弘 2012 他者志向的達成動機と親の期待内容および期待観の関係(2) 日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場 2012年3月9日~11日

伊藤忠弘 2011 他者志向的達成動機と親からの期待 - 自己志向的動機と他者志向的動機の関連づけに影響する要因の検討 - 日本教育心理学会第53回総会 北海道立道民活動センターかでの2・7 2011年7月24日~26日

伊藤忠弘 2011 他者志向的達成動機と親の養育態度 - 自己志向的動機と他者志向的動機の関連づけに影響する要因の検討(2) - 日本心理学会第75回大会 日本大学 2011年9月15日~17日

伊藤忠弘 2011 他者志向的達成動機と親の期待内容および期待観の関係 日本社会心理学会第52回大会 名古屋大学 2011年9月18日~19日

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 忠弘 (ITO, Tadahiro)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号: 9 0 2 7 6 7 5 9